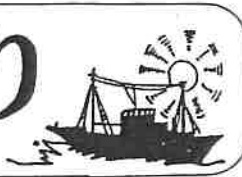


# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区 夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

## 福竜丸との対面から

焼津港の岸壁にけい留されていた、灰だらけの(当時そういわれていた)第五福竜丸にいく度レンズを向け、シャッターを切ったことだろう。その頃の私は東京から派遣されていたいち報道カメラマンであった。

昭和二十九年(一九五四)三月、四十数年前のことだから今回第五福竜丸展示館での対面は半世紀ぶりのご対面ということだった。展示されている船体によくぞ頑張ってくれたと心で叫び、右手で船腹をたたく、風雪に耐えた労苦をたたえた。あの時は職場の一同が、一年一回の今という研修旅行で、伊東温泉に一泊していた。宴たけなわの頃、東京の編輯部員から、焼津に水爆実験に遭遇したマグロ船が入港し、読売が特ダネとしてすでに動いているらしいとの報ら

## 松本栄一

せがあり、写真を焼津にという電話が入った。こうした慰安旅行の際でも、途中何か事件がおきた場合を想定してカメラと感光材料の一、二セットは持参していたので、酒をやらぬ私と今一人が浴衣をぬいで焼津に向かい自動車をとばしたのが夜半のこと。

約一週間焼津に滞在、乗組員の方たちが東京に診療のため移るのと共に、久保山さんの上京、私たちも焼津を引揚げた。以来、久保山さんの病棟に連日ばかり、ついに最終の日を迎えてしまった悲しいあの日々が福竜丸の船体を見上げているうちに想いがかんで来た。被爆後の広島・長崎に特派され、両市の被害状況をつぶさに撮影取材をした私には、手許にあるそれ等の映像を

もとに、いま反核のあかしのひとと役を為しとげつつづけているのときあわせて、第五福竜丸との奇しきえにしがあるような気がする。広島原爆ドームが、原子爆弾の惨禍を訴えつつづけているのと同じ意味あから、この第五福竜丸は、水爆の恐怖を伝える唯一の遺産ではないだろうか。もっとも第五福竜丸についても認識をもたなくてはいけないと痛感した。

核兵器の脅威が叫ばれ、廃止の運動がつづけられているにも係らず、最近実験開始の予告で全世界に大きな波紋を投げかけた大國がある。いつになったら本當の意味の世界平和は達成出来るのだろうか。

唯一の原子爆弾の被爆国である私たち日本人、そして、水爆実験の災禍をうけた日本人。「平和」とは、と考える前に原爆ドームを、第五福竜丸を想い出して頂きたい。

(「反核・写真運動」運営委員長)



縮尺5分の1の模型船を製作する近藤友一郎さん

素人の即席訓練がとっさの戦闘に  
対応出来るとは考えにくい。  
『戦争の影に隠れた戦力』正岡  
勝直著(かたりべ三九号)によれば、  
「関係長官の上申により、各  
軍需部に在庫する兵器の範囲内で、  
警備隊又は防備隊に一括貸与され、  
それを特殊漁船船長に貸与する形  
式を採った」とされ、兵器は七・  
七ミリ機銃二丁(彈藥包百二十発)、  
三八式小銃三丁(九十発)、拳銃  
二丁(三二発)、手りゅう弾(十  
発)、信号筒(五個)と定められ  
ていたようである。その後葉包類  
は戦闘経過にしたがい、十倍へと

増加したとのことである。  
この第二清正丸の沈没について、  
横須賀鎮守府司令官官発、父島特  
別根拠地司令官宛の電報によると、  
「一九九年五月一六日正午の位置、  
北緯三一度二六分、東経一五四度  
五八分を報告後連絡なく、消息不  
明」との電文があり、発信開始直  
後に通信が途絶えた。  
第二清正丸の最後の戦闘情況な  
どについては、通信途絶のため正  
確な位置などについては判明しな  
いが、隣接海域で哨戒任務につ  
いていた、第八太平洋丸の機関長滝口  
兼吉氏(現八歳)の話によれば、

「第二清正丸は東経一五四度四五分、北緯三一度十分付近の位置で、敵艦載機の攻撃を受け無線室に被弾し無線が故障、数少ない兵器で応戦したが、本船もろとも玉砕した」という。当時の乗

組員——鈴木台吉 近藤清八  
近藤金太郎 鈴木鉄蔵 鈴木安吉  
鈴木栄吉 鈴木金男 北原吉五郎  
池谷銀作 入山覚次郎 近藤友治  
前田寅吉 高橋助太郎 前田輝雄  
大石弥平 寺岡鉄夫 八木友吉  
田中恵吉 町田金市 早川要蔵  
良知重春 山本勘作 八木作蔵  
中山己之吉 植田賢太郎

以上二五名は全員戦死。  
最近、第二清正丸を建造した船匠近藤新吉氏の孫にあたる和船研究家近藤友一郎氏が、大切に保存してあった建造当時の正確な図面により、同船の五分の一の模型(全長六メートル)を復元し、祖父死後五十回忌の年でもあり供養と共に、同船で戦死した乗組員や、この造船にあたった職人の方々の名前を刻み、供養したいと四年掛かりで製作に取り組んだ。戦後五十年にあたり、五月中に完成したが、この夏には一般公開したいという。焼津港から徴用された数多くの戦没漁船と、漁師の霊をともらう上でも、関係者の期待を集めている。

問い合わせ先 近藤和船研究所  
〒四三三 焼津市大住二〇二一  
☎ 〇五四一六二七三三六六一  
(静岡県近代史研究会会員)

## 焼津で沖縄で長崎で

六月三〇日、焼津市文化センターで、市主催の「第五福竜丸事件六・三〇市民集会」が開かれ、平和協会の川崎昭一郎会長が記念講演を行ないました。集会には市民およそ五百人が参加。市長、市議会議長の挨拶、広島・長崎両市長のメッセージ、小中学生の作文朗読、誓いのことば等の式典に続いて講演会がもたれ、川崎会長は、一時間余にわたって、ビキニ事件と第五福竜丸被災の歴史の意義、第五福竜丸保存運動の理念、第五福竜丸展示館の果たしている役割等について語りました。市民集会は焼津市が一九八五年以来毎年開いているもので、第五福竜丸のパネル展示も行われました。

六月二〇日から二十五日まで、沖縄県西原町中央公民館で町主催の「島田興生写真展」が開かれ、昨年末展示館で展示され反響をよんだ写真を展示、島田氏の記念講演も行なわれました。また、六月二十九日から七月二日まで、長崎市の勤労福祉会館でも同じ写真展が開かれました。「国際市民フォーラム長崎県民連絡会」が主催したもので、ビキニから代表が参加したシンポジウムも開かれました。

核兵器と科学者

原爆開発の興奮と痛恨 (6)

—連鎖反応の達成と原爆の完成—

小川 岩 雄

連載 7

マンハッタン計画での二大開発目標のうちで、プルトニウム生産がウラン濃縮よりもすぐれている最大の利点は、作られるプルトニウムが原料のウランとは別の元素であるため化学的性質が異なり、化学的方法で比較的簡単に分離できることである。ウラン濃縮では同じ元素の同位体であるウラン二三五と二三八を、ごく僅かな質量差だけを利用して分離しなければならず、巨大な施設が必要で収率も低い。

その代わり、プルトニウム生産では天然ウランを大量の中性子で照射し、主成分のウラン二三八核に中性子を吸収させてプルトニウム二三九に変換しなければならぬ。当時の「常識」ではこれが大変な難題だったのだが、フェルミらは天然ウラン中になんとか核分裂連鎖反応を持続させることにより、解決することができた。一九四二年十二月二日連鎖反応系は初めて「臨界に達し」たのである。

そのさいに工夫され、シカゴ大学構内の運動場の観覧席の床下に組み立てられた装置——数千個のグラファイト・ブロックを積み上げて何本もの燃料棒や制御棒を通してのもの(「パイル」)——が今日の原子炉の第一号である。核エネルギーを人工的に解放する、というアイデアやフェルミの夢は、こうして思い掛けなくプルトニウム核爆薬の製造装置の発明という形でついに実現したのである。

歴史的な臨界に立ち会った四十三人の科学者たちは、その一人だったH・アンダーソンによると、「だれも笑わず、だれもが興奮して」おり、ウイグナーが開けたキャントー・ワインを紙コップで静かに乾杯したという。だがこの瞬間から、核エネルギーは科学者の夢を父とし、大破壊力を求める軍事的目的を母とする二重人格的存在として地上に生を受けてしまったことを、思い悩んだものは少なかつたようだ。しかし皆が立ち去った

後でシラードはフェルミと握手し、「この日は人類史上暗黒の日として後世に残るでしょうね」と言った、と本人が後に思い出を語っている。

出力200ワットで数週間連鎖反応をつづけた後のウラン燃料中には、予想通りプルトニウムが僅かながら確かに作られていることがわかった。そこで早速原爆に必要な数キログラムのプルトニウムを生産できる大出力の原子炉の建設が計画され、まずテネシー州オークリッジで中型炉、続いてワシントン州ハンフォードで大型炉と分離工場の建設が開始された。

このうちオークリッジ炉は翌四三年十一月から操業を始め、強く放射化された照射済み核燃料中にできた微量のプルトニウムを大量のウランや分裂生成物から分離する工程の開発や、大型炉の建設と運転の経験の蓄積、プルトニウムの諸性質の解明など、多くの予備的研究が精力的に行われた。

これらの経験に基いてハンフォードに本格的なプルトニウム生産炉三基と分離工場が建設され、四五年夏までにフル稼働に入った。なお高濃縮ウランの蓄積量もその頃には約十キロに達し、原爆一発は作れる状況となっていた。

一方、爆弾の設計や製造、起爆の方法、性能などの研究は、主にカリフォルニア工大のJ・ロバート・オッペンハイマーの指導の下で始められていた。ニューヨーク出身のこの天才的物理学者は、まもなくこの種の研究のために作られたロス・アラモス国立研究所の所長に迎えられる、爆弾の完成に大きく貢献し、「原爆の父」とまで呼ばれたが、戦後水爆の開発に強く反対したため国家的忠誠と機密保護を疑われ、度重なる審問の末すべての公職を剥奪された。

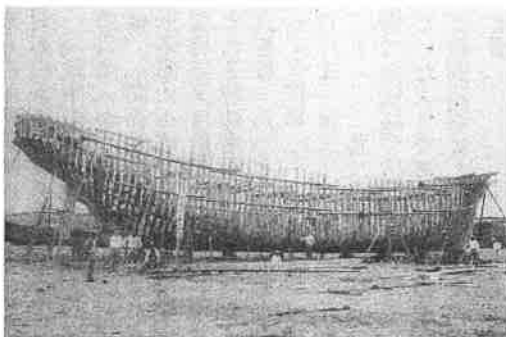
一九四五年三月、原爆はいよいよ完成に近づき、数か月後にはその爆発実験が行われる運びにまでなった。しかし皮肉にもその頃ヨーロッパでは連合国側が優勢となり、ドイツの敗北は時間の問題であった。一方東アジアでも連合国軍は急速に優位を取り戻し、東京など各都市に激しい爆撃を続けてはいたが、日本の軍部は容易に徹底抗戦の構えを崩さなかった。

こうした状況の下で、米政府部内には折角開発した原爆を日本の都市に投下すべきだとの意見が強まったが、シラードら科学者の多くはこれに真っ向から反対した。(立教大学名誉教授・協合理事)

焼津港徴用漁船「第二清正丸」の運命と50年後の復元

高橋 鑛 逸

今次十五年戦争では、全国各地の港から徴用(国の法律によって強制的に戦争に参加協力させること)された漁船・機帆船(小型運搬船)の数は膨大な隻数にのぼる。一九四九年(昭和二十四年)当時の政府機関「経済安定本部」が発表した、『太平洋戦争による我が国



建造中の第二清正丸(1934年10月建造、113.6トン)

の被害総合報告書』によれば、民間船舶の被害として一五、五一八隻の戦没船をあげているが、一般汽船(商船・貨物輸送船等)三二〇七隻に対し、漁船・機帆船の戦没船は三六五隻を数え、一般汽船をはるかに凌ぐ隻数であることは、あまり知られていない。小型船ゆえに組織規模も小さく、乗組員も家族姻戚関係者の乗組みが多く、これらの記録も今日に至っても十分とは言えない現状である。

遠洋漁業の基地として古くから栄えてきた焼津港では、五十数年前即ち昭和十二年から二〇年の終戦までに、九六隻(焼津漁業史では八五隻となっているが、その後筆者の調査によると十一隻の記載漏れがあると思われる)の大量の陸・海軍および農林省の徴用が相次ぎ、初期中国へ徴用された小型鯖漁船を除き、大部分の鯉・鯖漁船は、ありとあらゆる手段によって徴用され、内南洋諸島や西太平

洋、はたまた特設艦船として、海軍部隊の一戦隊として、この戦争に参加させられた。

終戦五十年の今年、各地・各所で多彩なイベントが計画されているが、徴用漁船の再認識も大きな課題の一つであろう。

焼津の徴用漁船第二清正丸も、戦争と漁船の命運を、いまでも雄弁に語っている。

第二清正丸は、当焼津市に在住する元船匠であった、近藤友一郎氏の祖父新吉と父佐吉氏が、当時木船から鋼船へと造船技術が移行するなか、昭和九年十月市内鰺ヶ島の「近藤造船所」において最後の木船として建造された。一一三・六トン、ジーゼルは東京市の新潟鉄工所二五二馬力で、新しく船橋を船の中央へ設置し、操船や魚群の見張りを容易にした当時としては、斬新な近藤造船自慢の漁船であった。

まだ戦局有利な昭和十七年一月上旬、農林省は「徴用特殊漁船団」を募集し、焼津港から東海遠洋の、第三大洋丸・繁伍丸・第二清正丸と、焼津信用の勇喜丸がこれに応募した。

農林徴用とは農林省特殊船団とよばれ、燃料及び付属油類は海軍で支給され、漁獲物(鯖延縄漁)

は農林省で買い上げ、一定の最低保証を約束せられたものであった。清水港、三崎港を基地とし、清水では漁労日数に応じて食糧などの配給品の支給をうけ、横須賀にて燃料を受け取り、三崎では漁業の資材・餌などを積み込み、海軍の指定した哨戒海域で操業し、漁場までの往復や、操業中も絶えず敵機動部隊の来襲に備え、見張りをしていたのである。

しかし海軍の指定した南鳥島付近の海域での操業は季節によって思うような漁獲が得られず、不安定な収入となり赤字が続いたので、再三海軍と交渉し、十九年二月十日横須賀鎮守府で、第八大洋丸(一一八トン)、第三福寿丸(一五三トン)いずれも焼津港所属漁船と共に、海軍の「特殊漁船」に採用され、徴用契約様式第一(一般徴用で乗組員はそのまま乗船する契約である)で契約し、横須賀鎮守府所管配属となった。軍人は乗船せず船員のみ二五名で、機関銃一、小銃三、四挺という殆ど無防備に近い装備で哨戒任務に就いていた。前記第八大洋丸乗組員の話によれば、大正生れの若者は総て、横須賀に於いて機銃・小銃の使用撃ちかたなどの訓練をうけたとのことであるが、軍人まがいの